

## 瀬川 深 論

和 田 勉

一

瀬川深は小説家であると共に、遺伝学者として大学に勤めている。『ゲノムの国の恋人』（平25、小学館）は専門の生命科学の知見を活かして、遺伝子をテーマにした小説である。瀬川は平成十九年に「チューバはうたう」で太宰治賞を受賞しているが、小説家としての評価は定まっているわけではない。「チューバはうたう」では、楽器のチューバを溺愛する若い女性の内面が一人称の語りで綴られている。それは『斜陽』『ヴィヨンの妻』など女性一人称の語りを得意とした太宰との親近性を示している。ただし、瀬川が太宰ほど繊細で詩的な感性を持ちあわせているわけではないし、女性の主人公に強い感情移入をしているわけでもない。

これらの作品の他に、『ミサキラジオ』（平21、早川書房）では、港町を舞台に演劇人くずれの水産物加工会社社長が、地元

ラジオ局を作った際の地域住民の変容が描かれている。『我が祖母は歌う』（平22、朝日新聞出版）では、宗之輔と結婚し、敬一郎と賢次郎を育てた老女の姿が描き出されている。時代の変動についていけないが、健気に生きていたのである。どちらの作品にも生命科学的な要素はほとんどないので、本稿では詳しくは取り上げない。

本稿では、主に『ゲノムの国の恋人』について生命科学との関わりを中心に考察したい。また、作家及び作品の特質やその評価にも言及したい。生命科学的な言説が、『ゲノムの国の恋人』という物語を展開する上でリアリティを獲得するために機能していることを明らかにする。それは、瀬川の小説家としての方法や独自性を見極めることでもある。また、『ゲノムの国の恋人』の現代小説としての可能性と限界を明らかにする試みでもある。

瀬川は平成十九年から本格的に作家活動を始めたし、作風もストーリーテラーとして通俗的な要素を含むこともあり、先行研究は皆無に等しい。『ゲノムの国の恋人』が、純文学なのか大衆文学なのかという視座からも考察したい。

二

まず『ゲノムの国の恋人』の中で生命科学の知見が、どのよ

うに活用されているかということについて検証したい。

主人公のタナカは生命科学の専門家、遺伝子診断に関わる仕事に就いている。一年前にアメリカの学会に来ていた際に、「懐胎、誕生、成長、発達、罹病、老化、死。多彩な局面を持つ生命という現象を分子という物質の単位から理解しようとする学問は、とりわけ二十世紀の後半から急激な発展を見せた。生命というものが決して神の御業<sup>みわざ</sup>なのではなくあくまでも分子運動の結果であることが、もちろんまだそのごく一部であるとはいえ、次々と解き明かされてきた」（第一章）と思う。二十世紀後半からバイオテクノロジーに関する研究が急成長して、生命を分子レベルで解明する開発競争が激しくなったのである。生命活動を神に由来する崇高なものと捉えるのではなく、分子の運動と割り切って捉えているところがいかにも生命科学者らしい。

タナカはバイオテクノロジーの外資系企業に勤めていたので、「弊社GENOPILLOTAGEは、ヒトの遺伝情報解析にあたりしいページを付け加えました。癌<sup>がん</sup>から高血圧から老人性認知症に至るまで、あなたのゲノムに潜む病気の素因を探り当て、来るべき発症に備えます。必要なのはたった一ミリリットルの血液です。驚くべきことに、コストはわずか百五十ドル!」（第一章）とパンフレットに書かれた自社ブースに座っていた。タナカはこのような遺伝情報の解析能力が認められ

て、ある国家から個人的に業務を委託されることになる。そこには、タナカの勤めていた日本支社の経営不振による閉鎖という事情も絡んでいた。

タナカは分子生物学の現状と自己の仕事内容を、依頼人に分かり易く説明する。「必要なのは、小さじ一杯でいど、一ミリリットルの血液があれば十分。ここからDNAを取り出し、高速シークエンサーにかければ、一週間後にはその人の全ゲノム情報を手に入れることが可能です。そこにはあらゆる生命の情報を書き込まれていることでしょう。性別、血液型、皮膚の色、代謝の速度、病原体への感受性、遺伝性疾患の有無、等々」と述べる。高速シークエンサーという技術によって、ゲノム情報は一週間で提供できるということを、タナカは強調する。病気のゲノム診断に、高速シークエンサーがいかに画期的な技術であるかについて説明する。<sup>詳</sup>このような場面では、タナカが仕事を依頼して来た男に説明する形を取りながら、遺伝子診断の現状を作者が読者に予備知識として持つてもらうという役割も果たしている。

タナカは分子生物学の現状を、現地の依頼人に説明する。その際に、「細胞はいったん分化してしまえば、ふたたび他のなにかになることはできないと思われていました。つまり、心臓が神経になったり、皮膚が胃袋になることはないはずでした。ところが最近、その常識を覆し、いったん分化した細胞をまっ

さらな状態に戻して他のものへと分化させる画期的な発見がされています。お聞き及びかもしれませんが、iPS細胞というものです」（第1章）と述べる。ノーベル医学生理学賞を受賞した山中伸弥教授の業績も、作品内の細胞分化にまつわる話題として積極的に取り込まれている。時代の最先端にある生命科学のタイムリーな話題を取り込むことによって、この作品の持つ先駆性も示そうという意図と思われる。

今回タナカが依頼された仕事は、クライアントの男性と結婚相手の七名の女性について、遺伝学的な適性を調べることである。クライアントの男性は、実はその国の閣下であることが後で明らかになる。国家レベルのことにすることによって、実験器具など費用面での問題について、作品としての不自然さが生じないように配慮されている。タナカの使命は、手に入れた七名の女性のDNAを精査して、そこにいかなる病気の素因が潜んでいるかを調べ上げることである。

タナカは七名の女性から採血を終えた後に、「あくまでも客観的な遺伝情報の検索なのであって、そのためのすべての手がかりは、眼前の七本の採血管に沈む十ミリリットルの血液の中に秘められているのである。なにしろ貴重な血液であり、おろそかになどできない。まずはセオリー通りにDNAを取り出そうとタナカは思った。残りで染色体標本も作り、凍結細胞のストックもこしらえておこう」（第4章）と思う。彼女たちの氏

素性よりも、あくまでも血液のDNAデータに固執する。それでも、実際に七名の女性たちを目の当たりにすると、彼女たちの運命につながるという感慨も覚える。

染色体を取り出す場面では、「タナカはチューブを遠心したのち、薄い塩化カリウムを入れてよく混ぜた。このまま三十分も放置しておけば、まるで卵の殻をむくように、細胞核は次々に弾けて中に抱く染色体を外へと放り出すはずである。タナカがまだ大学に入りたてのころの実習で教わったことで、タナカを含めた同級生たちは驚き合ったものだ。マジ？ これだけで染色体が見られるんだ！ その通りだった、酢酸や塩化カリウムといったごく基本的な試薬を用いた、高校を出たての小僧つ子たちができるぐらいに簡便な実験で、リンパ球の中から染色体は弾け出てその姿をガラス板の上に横たえる。それでいて、この染色体なる物質こそが遺伝情報を伝える本体であるということが分かったのはごく最近のこと、ほんの百年も経っていないのである。タイマーを三十分にセットし、タナカは窓枠にもたれた」（第4章）とある。遺伝子情報を伝える本体の染色体を取り出す作業がいかに簡便なことであるかが、分かり易く記されている。そのためにタイマーをセットすれば、後はする作業もないほどである。

タナカは採血した後、そこから生命の設計図であるDNAを取り出す。「タナカが相手にするのはもっぱら白血球であつ

た。生命の設計図たるDNAは複雑に折りたたまれて染色体をかたちづくり、白血球の細胞核の中に潜んでいるからである。この白血球だけを取り出すためには、血液にバッファーを入れてしばらく放置しておけばいい。邪魔者の赤血球ははじけて壊れてしまう。これを高速で遠心すれば、白血球は白い澱<sup>おろ</sup>のようにチューブの底に沈んでくるだろう。その白血球を溶かし、タンパク質を取り除いた上で、百パーセントのエタノールを入れて振り混ぜればよい。DNAは水によく溶けてエタノールには溶けないから、あたかもエタノールから逃れるかのように、DNAは白くよじれる糸くずのような姿をチューブの中に現すのである。この糸くずを水に溶かしてやれば、首尾よくDNAの溶液が手に入る。ここまでの行程は、およそ一、二時間。たったそれだけの時間で、DNAなる生命の設計図は、チューブの中にとろりと濃い無色透明の姿を横たえる（第3章）とある。白血球から生命の設計図であるDNAを取り出す過程が、詳細に記されている。だが実際にはソフトウェアの不具合で、うまく解析できなかつたりもする。

タナカはヒトゲノム解析の実情について思う際に、次のようなことを思い浮かべる。「二〇〇三年、予定を二年も前倒しにしてヒトゲノム解読の終了が宣言された。一九五三年、ワトソンとクリックがDNAの基本構造が二重らせんであることを発見してから、きっかり半世紀後の偉業であった。ヒトゲノム計

画が明らかにしたことはもう一つある。それは、ヒトゲノムが個性豊かな複雑さを持つていてということであった。もちろんそれは、部分的にはかつてから知られていたことでもある。だいたい人間はこれほど千差万別なのだから、ゲノムに個人差があるのは当然なのだ。たとえば、CAGがCATとなるような一つの塩基の違いはSNP<sup>一塩基多型</sup>と呼ばれ、ヒトゲノムの中に一千万箇所も存在している。また、CAGCAGCAG……といったような三つの塩基の繰り返しはトリプレットリピートと呼ばれ、これが人によっては数回のことでもあれば数百回を数えることもある。さらにはこのような小さなものだけではなく、はるかに大きなサイズの相違もヒトゲノムの中には潜んでいることも分かってきた。CNV<sup>コピー数変化</sup>という変化は、常ならば染色体一対分、つまり二コピーが存在しているゲノム情報が一コピーに減つていたり三コピーあるいはそれ以上に増加していたりする部位のことを指す。つまり、数千、数万、数百万もの塩基が丸ごと抜け落ちたり、あるいは丸ごと繰り返し返されたりしているダイナミックな相違なのだが、これはなんとヒトゲノムの三割以上の箇所が存在している。つまり、いざヒトゲノムを隅から隅まで調べ尽くしてしまえば、想像していたよりもはるかに豊かに、あちこちで、さまざまに、ヒトゲノムはおのおのの個性を主張していたのだ」（第6章、傍点本文）とある。「SNP<sup>一塩基多型</sup>」とは、ヒトゲノムのDNA約三十億個の塩基配列が、標準的な

塩基配列と比べると、一塩基だけが違って多様性が生じることである。「CNV」<sup>コピー数変化</sup>とは、ヒトゲノムのDNAが、父方由来のものと同方由来のもので通常二コピーあるはずのところ、欠失して一コピーしかなかったり、重複して三コピー以上あったりすることである。つまり、「SNP」<sup>一塩基多型</sup>が遺伝子の「配列の個人差」であるのに対して、「CNV」<sup>コピー数変化</sup>は遺伝子の「数の個人差」である。これらは最先端の生命科学の知見が、そのまま作品の中に取り込まれており、作品のリアリティを保証するものとして機能している。

タナカは遺伝性疾患について考える際に、学生時代に習ったことを回想する。「あのときの講師が例に挙げたのは、<sup>イブシロン</sup>糖質代謝異常症という病気であった。これはある種の糖類を生まねつき分解できない病気であり、この糖類は体の中に蓄積し続けて長きにわたってさまざまな障害を引き起こす。現時点で治療法はないので、その糖類を食べないという食事制限を一生涯にわたって続けなければいけない。この病気の発症は一人に一人の割合と見積もられていて、まずは頻度の低い遺伝性疾患と言っているだろう。しかし、その保因者は計算上五十人に一人の割合で存在するのである。そう考えると、まれな病気というものが、急に身に迫って感じられてくる。この話をしてくれた講師は冗談めかして言ったものだ。『病気の保因者である確率ってのはあんがい高いんだよ。』<sup>イブシロン</sup>糖質代謝異常症の場合は

クラスに一人つてところだ。君らが隣のクラスのカワイコちゃんに恋をして、首尾良く成就したとしても、その両方が保因者である可能性は大いにあり得る。それぐらい、遺伝性疾患ってのは、身近なものなんだよ』(第6章)とある。ここには、遺伝性疾患が身近なものであることが具体的に示されている。ただし、遺伝子は二つあるので、保因者であってももう一つがバックアップとなつて働けば、遺伝病は姿を現さないということも付け加えられている。

タナカは国の要人たちの前で、DNA解析の結果を報告する。「高速シーケンサーの解析結果を提示いたします。候補の女性たちと同様に、クライアント男性につきましても、ゲノムDNAを網羅的に解析し、変異をすべて検出した上で、予想し得る疾患リスクを算出してゆきました。こちらはクライアントの男性における遺伝子変異と、対応する潜在的な疾病リスクであります。具体的には、双極性障害のリスク、アスピリンアレルギーのリスク、前立腺癌抑制遺伝子の変異、反復性熱性痙攣<sup>けいれん</sup>の可能性……」(第9章)と述べる。男性一名と女性七名のすべてが潜在的な遺伝性疾患のリスクを抱えていることを説明する。あくまで発症の可能性があるにすぎなくて、必ずしも発症するわけではないとも付け加える。

このような生命科学的な言説が作品の随所に取り込まれることで、遺伝子診断における臨場感が確保されている。しかも、

生命科学の専門家であるだけに作品内に的確に用いられており説得力がある。

### 三

『ゲノムの国の恋人』の主題や構成や登場人物や文体などについて、更に詳しく考察したい。

本作の主題は、国の閣下の伴侶を「パーフェクトベイベー完全なる嫡子」のために遺伝子診断によって選ばうとしても、そのような科学的なデータは現実の人間関係では適用し難いということである。それは作品の表題である「ゲノムの国の恋人」にも顕著に示されている。遺伝子を重視して配偶者を選ぶということは、所詮幻想でしかないというメッセージである。もつとも当事国の政府内にも妃選びで対立しないように、科学的な判断で決着しようという思考があつたのである。

タナカは、「人間誰しも心の奥底には、余人には決して立ち入れず、ゲノムなる万巻の書物にも書き込まれていない深い沼を抱いているものなのだ」（第8章）と思う。ゲノム解析がいくら進歩しても、人の心の中はもつと複雑で捉え難いというのである。タナカは日本にいた時に周りのアベックなどを見ていた際に、遺伝子診断の可能性と限界もよく分かっていたのである。

『ゲノムの国の恋人』には、遺伝子診断によって生まれて来る子供の病気などが予測できる近未来の人類の姿が描き出されている。「ゲノムの国」とは、作品の舞台となつた東南アジアの一つの国のことである。ま日本以外の東南アジアの国を舞台としたことで、この遺伝子診断と世継ぎの物語にかえて効果的に働いている。「ゲノム情報をどう取り扱うかは、本来ならば高度に倫理的な問題」（第6章）であるはずだが、この異国ではそのような倫理的な問題はそれほど考慮しなくてよいからである。採血の際にも、「遺伝学的検査の同意書」（第3章）は必要ないということになる。もつとも、「この国の奇妙なシステムは、祖国たる日本の陰画であるようにも思われた」（第3章）という側面も見逃してはなるまい。それはイトウの言う「市場原理主義者と国家主義者はあんがい相性がいい」ということからの連想である。この異国では独裁国家と個人が運命共同体であるが、翻つて日本について見ても、資本主義による自由競争が、かえつて国家による個人の抑圧につながりかねないというのである。ただし、作品全体として見れば、日本の現実を逆照射するような要素には乏しい。

主人公タナカは遺伝子研究の学者であるが、特に個性的なキャラクターというわけでもない。タナカの発する台詞もありふれたものでしかない。強いて個性的なところを挙げるとすれば、タナカは愛するラワヤ兵長から採血し、遺伝情報を解析す

る。その際に「女性の身体を作り上げてきた情報の丸ごと」(第8章)だと思ふ。更に「人類史上だれも経験することのなかった、人形偏愛症の極北なのかもしれない」(同)とも思ふ。このように愛する女性の採血から「人形偏愛症」という形で特異な想像力を働かせるところに、タナカの特質は示されている。愛するラワヤを形作るゲノムを、情報として所有したいというマニアックな願望である。

また、タナカは市街の娯楽場に出かけた時に、「カジノとゲームセンターの無雑作な混合は、これまた境目なくディスクに連なり、キャバレーにまで連なっていたのである。タナカはキメラという言葉を思い出した。生物学の世界では一つの個体に複数の遺伝情報が混在していることを指す用語だが、本来は、ライオンの首にヤギの胴にヘビの尾を持った怪物に由来する名前ではなかったか。まさしくこのように、異質なものどうしの不調和な混交である」と思ふ。目の前の混沌とした光景からキメラを連想するところが、いかにも生物学者らしい。それは、ギリシア神話の怪物のイメージにつながるだけでなく、二対以上の親に由来する異なった遺伝子型が身体の各部で混在する生き物という生物学の事実にもつながり、作品の内容とも合致している。

タナカは外国や置かれた状況への適応能力が高いと言えるが、従来の小説の主人公にありがちな内面の葛藤や特異な感性

などといった要素は乏しい。それは、この作品の持つ冒険譚という要素とも関わっているだろう。なお、タナカは七名の女性の遺伝子検査を行い、彼女たちの運命を左右しかねないということも思ふが、それも通常の思考のレベルに留まっている。

脇役のイトウは現地人で、通訳兼タナカの補佐役といったところである。現地の状況を的確に把握し、タナカに伝える役割を果たしている。実務能力が高く、タナカの仕事が順調にはかどるように巧みに手配している。そこには、権謀術数といった策略は見られない。なお、閣下のそばにいた際に過呼吸発作で倒れてしまうような小心なところもある。

閣下の妃候補となつた七名の女性については、明確な人物像として表出されているわけではない。「1番」から「7番」まで、番号で管理されている。また、タナカの説明の際も、七名の染色体像として順番にスライドに映し出される。あくまでも記号的な存在にすぎず、どのような遺伝子を持つていて、どのような病気を発症するリスクがあるかということの方が重要なのである。そこには、名前を公表できないという事情も働いている。七名の女性は自らの個性化を図り、他の女たちとの差異を示そうとするわけではない。あくまでも遺伝子の違いが問われるだけで、個性を示す必要もなかったのである。ここでは主體的な個性は存在せず、どのような遺伝子を持つかということが重要で、個人は遺伝子の乗り物、運び屋にすぎないことにな

る。これまでの小説であれば、七名の妃候補の容姿や性格などが微細に記されていたであろうが、そのような記述は必要ないものとして意識的に削除されているのである。

七名の女性の教育係のシドタは、厳格な指導者である。スパルタ教育に徹する、典型的な人物像と言える。最初にタナカを空港に迎え入れた際も、七名の女性たちをタナカの研究室へ連れて来た際も、シドタは無駄口をたたかず無愛想のままである。結末でも仕事を辞退する旨の文書を一方的に送りつけてくる。

これらは悪意に因るものではなく、性格的なものとして表出しているといい。もつとも守秘義務を必要とする職務であるため、仕事内容に起因しているという側面も窺える。

女性兵士のラワヤは外国人の賓客を接待することが裏の顔だったのであるが、特に新しいタイプの女性像というわけではない。結末を見ると、子孫を残すという立場に安住していると批判されても仕方があるまい。なお、タナカとラワヤ兵長の密会の場合、堅固な陣地のトーチカ内であるのは意表をついていて効果的である。タナカはそこではラワヤの正体を知らないままで彼女の虜になり、拘束されたような状態に置かれてしまうのである。もつとも、後にタナカがトーチカ内をそのような外国の要人を接待する場であると知らされても、不快な感覚を全く起こさないのも少し違和感が残る。

本作は、第1章「華僑の別邸」から第10章「葬列と勝利」

までの全十章で構成されており、物語内の時間の順序に記されている。タナカが外国での任務を果たし、クーデターに巻き込まれそうになりながら危うく脱出するまでの往還記である。なお、冒頭に「プロローグ」、結末に「エピローグ」も付いているが、プロローグが単なる導入の役割しか果たしていないのに比べると、エピローグの後日譚は事件後の顛末が詳しく記されている。

第3章は「エンゾ・グラムシ」という章立てがされているが、エンゾはタナカのアメリカ時代の旧友であり、現在は実験機材等を輸入する仕事をしているが、物語全体では脇役の一人にすぎまい。第5章「楽園の晩餐」でも、エンゾの放蕩する姿が描かれているし、第9章「運命の人」でも医薬品の卸をしている姿が描かれている。ただし、タナカがエンゾに「君には本当に世話になった」（第9章）と言うが、そこまでの影響を与えたわけではない。章立てされるほどの人物であれば、もう少し重要な役割を負わせても良かっただろうが、人物形象として物足りない。第6章の「トーチカ」では、タナカとラワヤの密会の場合にイトウから電話がかかってくる。この時に、タナカはラワヤを問い詰め、二人の間のドラマとして展開すべきなのに、あっさりこの章が閉じられてしまうのは物足りない。瀬川にすれば、心理劇ではなく冒険譚を意図したのであろう。第10章「葬送と勝利」では、洪水（注）の中をタナカとラワヤが小舟で



脱出するシーンは、『旧約聖書』創世記のノアの方舟のシーンと重ねようとして見るとよい。つまり、どちらも人類の墮落がもとで起きた大洪水に、方舟に乗って難を免れるのである。『ゲノムの国の恋人』はまさに往還記であるが、この試練を経ることで、主人公の境遇に変化はあっても人格などが変容することはなく、あくまで周囲で起こる事件を目撃する視点人物にすぎないところが物足りない。

作品の結末は、反政府派のクーデターにより、「様々な疾病原因を抱えた將軍閣下は国家元首たり得ず」（第10章）というオチとなっている。七名の花嫁候補の誰がふさわしいかという展開から、花婿自身に問題があるから国家元首として不適格ということになる。このオチは、物語を展開する上で効果的に機能していると言える。

「エピソード」では、タナカが、ゲノム解析の実績により東欧の大学付設のゲノムセンターに勤めるようになる。そこにタナカの子供を身籠もったラワヤが訪れて、ハッピーエンドの結末となる。ここには、遺伝子診断よりも、現実の男女のつながりの方が重要であるというメッセージが込められているだろう。ただし、外国の賓客を接待していたラワヤとタナカとのつながりを、単純に愛情によるつながりと捉えるわけにはいくまい。タナカはラワヤの仕事内容に疑問を持った際も、嫉妬の感情にとらわれそうになるが、すぐに気持ちを切り替えている。

当初のタナカはあくまで外地での遊びや息抜きとしてラワヤに接していたので、ラワヤの妊娠している姿を見て愛が芽ばえたというのも少し不自然である。二人の間における身体のつながりと精神のつながりということでは、身体の要素の方が大きいわけで、それは遺伝子の継承というこの作品の意図とつながるようなものでもあるまい。タナカは胎児との間に生命の数十億年のつながりを連想したりするが、そのような観念的な思索で納得できることでもあるまい。もともと、ここではタナカの内面の葛藤よりも、長い時を経た生命の連鎖の方にタナカの意識は向かっているのである。志賀直哉『暗夜行路』や太宰治『人間失格』などに見られた内面の葛藤は、ここには見られないのである。『暗夜行路』や『人間失格』の主人公が近代的自我に固執しているのに比べると、『ゲノムの国の恋人』の主人公は、生命の数十億年のつながりという時空間を思うことによって、自己の感情に折り合いをつけているとも取れる。しかし、それが読者にも納得できるように表出されているわけでは必ずしもない。

この作品の文体については、言葉の多義性などはほとんど考慮する必要はないだろう。登場人物の台詞に、皮肉や風刺などの裏の意味を探る必要もあるまい。それは、内容が生命科学的なものであることも密接に関わっており、基本的には自然科学やノンフィクションの言説に近いとも言える。書き手の異化の

戦略としての文体というようなものは、ほとんど示されていない。強いてあげれば、生命科学の言説にこだわるところに、瀬川独特の異化の方法が窺える。

現地人との日本語による会話や文書のやりとりなどでは、話し言葉も書き言葉もその表記を、てにをはなどにこだわる日本語の特質として差異化しながら描いている。日本語として不自然なシドタの台詞やタナカ宛の匿名の手紙も、微妙な誤りをそのまま表記してリアリティを出している。結末でも拷問で負傷したイトウがうまく日本語が話せなくなり、それをそのまま記しているが、すぐに回復して普通の話し方に戻っているところは少し違和感が残る。これらの場面では、判読するのに苦勞する迷文をあえてそのまま記すことで、異国にいる臨場感を出そうとしている。ただしノイズを含んだ言葉をそのまま表記しても、作品としての芸術性は確保されているとは言えない。

#### 四

『ゲノムの国の恋人』では、瀬川の専門である生命科学にまつわる知見を積極的にストーリーの中に取り込んで<sup>註</sup>いる。そこでは、個人の存在は身体内の遺伝情報によって運命が左右されかねないという思想が展開されている。それは、個人の経て来た前歴と、未来に残すべき子孫の両面にわたるといっているのであ

る。このように人文科学と自然科学の垣根を越えて、できる限り表現を広く捉えるならば、これまででない独自の知見に出会うことができるのではないかとということが試みられている。

ただし、『ゲノムの国の恋人』では、生命科学的な要素と恋愛小説的な要素が混在しており、作品内で融合しているとは言いがたい。主人公を含む登場人物に内面性が乏しく、類型的であるとも言える。全能である作者が、あまりにも恣意的に登場人物やストーリーを操作しすぎており、作品内の内的必然性によって展開しているとは必ずしも言えない。また、恋愛小説じみたストーリー展開に、大衆文学的な通俗的な要素も含むことは否定できない。作者の意図がラブロマンスを描くことにあり、生命科学の知見はそれを展開させるための素材にすぎないというなら話はまた別である。そうではなく、生命科学に関わる斬新な小説によって新機軸を打ち出そうと意図したのなら、作者の意図と作品の内容が必ずしも一致しているとは言えない。

大衆文学を含む文学の読者が、作品の読み手であるだけでなく作り手でもあり得るといふことは、読者が暗黙裡に作者に働きかけることを通じて作品に介入することに示されている。読者を想定せずに作品を書くといふことは、作品が出版されることを想定して書かれる以上、ほとんどあり得まい。ただし、ここで瀬川がどのような読者を想定したかということが、改めて

問われるべきであろう。それは、本作の内容から推察すると、映画の観客と同じようなドラマ性や娯楽性を求める読者と思われる。面白いストーリー展開の一方で、登場人物が類型的で心理の掘り下げに欠けるところに特に示されている。

遣伝子診断を巧みにストーリー展開に取り込んではいても、遣伝子診断のもつ負の側面などにはほとんど言及していない。生命科学の抱える現実の諸問題も、想像力によって表出するところは可能なはずである。そのような側面に切り込んでいないところに、主人公のみならず作者自身の問題意識の希薄さも透けて見える。現代作家としてのしたたかな企みに欠けることや、強靱な批評精神に乏しいことも課題として指摘できよう。

注1 シークエンサーによる医療の現状については、水島純子・菅野純夫「次世代シークエンサーの医療への応用と課題」（『モダンメディア』57巻8号、2011）等が参考になる。

注2 瀬川は「セガワブログ」(<http://segawashin.blog.fc2.com/blog-category-14.html>)の中で、「ゲノムという人の遺伝情報の総体が関わってくる小説ですが、ものがたりは一種の往還記の体裁を取っています。主人公がある場所に往って還ってくる物語で、神話や叙事詩にも多くの類例があるところを見ると、人類のもっとも古い物語形式のひとつであるかも知れません。オデュッセイアなどは典型的な往還記です」と述べている。遣伝子の連続という「人類のもっとも古い物語」

を描く際に、往還記という「人類のもっとも古い物語形式」を用いている。

注3 往還記ということでは、泉鏡花『高野聖』や芥川龍之介『河童』や井上靖『天平の甕』などの作品を想起させる。

注4 第6章の最終行では、ラワヤの「私は、祖国防衛の任に就いております」という一言が記されており、タナカのみならず読者にも、ラワヤの正体が推察できる仕組みになっている。

注5 この洪水は、「反乱分子が山岳地帯に逃走し」「ダムを壊した」（第10章）ことによって発生したのである。

注6 小森陽一は「近代文学と自然科学」（紅野謙介・島村輝他『文学がもつと面白くなる——近代日本文学を読み解く33の扉』（平10、ダイヤモンド社）の中で、「自然科学の専門的な知が、曖昧な形ではあれ、読者共同体の共有言語になったとき、文学はそこから多様な想像力の資源を汲み上げていくのである。現代小説の前面に、遣伝子や免疫やウイルスが登場してくるのもそのためなのである」と述べている。